

対少数言語民族集団プロパガンダの道具としてのフリウリ文化

Friulian Culture as an Instrument of Propaganda in Conflict with the Linguistic-Ethnic Minorities in Friuli

山本真司 Shinji Yamamoto
東京外国語大学 Tokyo University of Foreign Studies
shinji@tufs.ac.jp

Abstract: In the history of the so-called Reto-romance question, one tends to suppose that there have been a series of hot battles between the identities of the linguistic minorities (to be defended) and the Italian national identity (to be imposed upon all the population of the Country). Yet in the case of Friuli, whose major native language, Friulian, is normally considered to be one of the Reto-romance languages, the dominant ideology of the United Kingdom of Italy has often claimed to a strong affinity between the local culture of Friuli and the so-called “Latin-Roman civilization” identified with Italy itself by the political current of the time. Thus the official politics, together with the public cultural atmosphere in general, has been glorified the cultural heritages of Friuli, and have often made use of them as an instrument of the propaganda that aims to spread the “Italianness” all over the State assimilating the other ethnic-linguistic groups. Among the minorities that suffered such social pressures were also the communities of the Slovene-speaking people in Friuli and in the Venezia Giulia.

キーワード Keywords: フリウリ Friuli、スロヴェニア Slovenia、イタリア Italy、少数言語 minor languages

0. はじめに

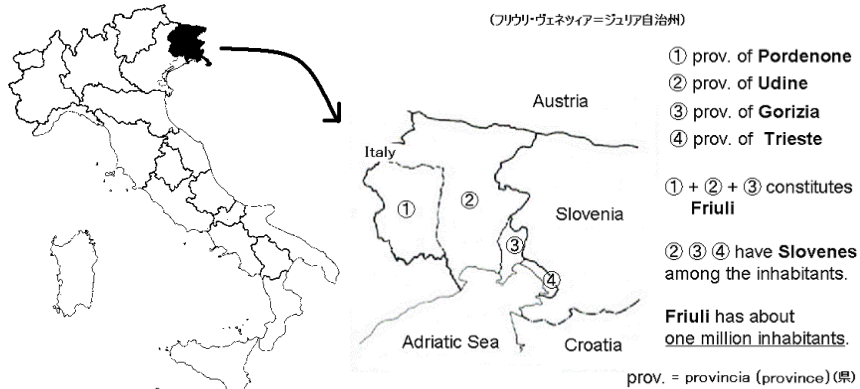
イタリア北東部のフリウリ地方 Friuli [1] でよく歌われている新民謡 [2] をいくつか取り上げ、そこに現れている、フリウリの言語的・文化的アイデンティティに関わる、ある問題を紹介したいと思う。

フリウリの土着の地方語であるフリウリ語の話者は、言語的マイノリティとして、イタリア語の圧力のもとで苦しんだことが知られている。ところが、フリウリ語は、イタリア語の圧力に苦しむのみならず、まさにそのイタリア語およびその文化的アイデンティティに関するイデオロギーの道具とされ、より規模の小さい少数言語コミュニティである、スロヴェニア系住民への同化政策に手を貸すことになってしまった。そのような事態を招いたイデオロギーの一端を、本稿では、垣間見ることができるであろう。

ここで取り上げた歌は、大雑把に言って、両世界大戦間の時代に生まれ、一般によく知られるにいたったもので、その時代の雰囲気を反映しているとともに、そのような雰囲気をさらに盛り上げ、そこに現れるイデオロギーを人々の意識の中に浸透させる役割を果たしたに違いない。

なお、ここで紹介されている諸事実は、フリウリではよく知られていることであり、誰か特定の研究者の分析によって明らかになったというような事柄ではないが、同様の問題への言及がなされている文献の一つとして、例えば、Maniacco / Montanari (1978) pp. 104-107 を挙げておこう。

[1] ごく簡単に言うと、イタリア共和国北部の最も東に位置するフリウリ・ヴェネツィア＝ジュリア自治州のうち、トリエステ県を除く3つの県(ポルデノーネ Pordenone 県、ウディネ Udine 県、ゴリツィア Gorizia 県)をあわせたものがフリウリ地方であると一般に考えられている。



フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア自治州。Stranj (1989)などを参考にして作成。

[2] 以下、引用された3つの歌のテキストは、フリウリ語で書かれている。テキスト校訂の問題(それにはフリウリ語の方言学を踏まえた詳細な議論が必要となる)は、残念ながら本稿では詳しく扱う紙面の余裕が無い。テキスト中のフリウリ語の綴りは、筆者の判断で手を加えることをせず、原則として引用元のテキスト通りのままにしておいた。フリウリ語に標準化された正書法(フリウリ語の標準化に際しては、個々の音の表記法のほか、形態の選択もの問題となるが)が導入されたのは20世紀も終わり近くになってであり、ゆえに、これらのテキストの言語は、現在の標準化されたフリウリ語とは異なることをお断りしておく。

1. ラテン起源の言語としてのフリウリ語

多くの人が信じている説によると、フリウリの主な地方語であるフリウリ語は、イタリア語とは異なる少数言語である「レト＝ロマンス(諸)語」の1つであるということになっている。レト＝ロマンス諸語のなかで、(よく話題にのぼるという意味で)一番良く知られているのは、おそらく、スイスのロマンシュ語である。そのため、ロマンシュ語が、レト＝ロマンスの代表的・典型的なケースであると思っている人がいるかもしれない。

さて、ロマンシュ語の話者およびそれを擁するスイス連邦は、イタリアの失地回復主義やファシズムの領土的野心のため、イタリアとのアイデンティティ上の対立を経験することになり、イタリア人と見なされることを拒否することを政治的に表明する選択をしたことはよく知られている。そのような経緯を知っている人は、おそらくフリウリ語の場合にも、少数派としてのフリウリ語(とその話し手)および多数

派である公用語たるイタリア語 [1] との間にも、言語的・文化的アイデンティティをめぐり、少なからぬ対立や葛藤があったに違いないと想像するかも知れない。

そのような予想からすると驚くべきことであろうが、フリウリ語の話者（少なくとも多くの知識人）の場合は、19世紀から20世紀にかけての、現代フリウリ史における、フリウリ文化およびフリウリ人のアイデンティティの自覚の芽生えにおいては、むしろ、イタリアの文化との近親性が強調されたのであった。

これは、フリウリの「ラテン系の」起源の自覚による。つまり、フリウリ語がラテン系（ロマンス系）の言語であるという事実の認識によるものである。このような認識は、フリウリ人とその文化の起源を、ローマによるフリウリの征服および植民地・植民都市の建設へと遡らせることになる。こうして、フリウリは、古代ローマと自己を同一視し、その過去の栄光を高揚した。

イタリア統一王国を実現した、「イタリア復興運動」Risorgimento と称される現代イタリアの統一国家建設の動きは、イタリアとその文化の起源を古代ローマ帝国に求め、まさに古代ローマの栄光の復興という看板を掲げていた。そのため、フリウリは、自らのローマ起源を自覚することで、イタリアとの文化的同一性、また統一イタリア王国との政治的一体性の主張へと至ることになり、フリウリをローマの代表者の1つとみなすイデオロギーを生み出したのであった。詩人フルック Enrico FRUCH [2] の次の詩「アクイレア」Aquilee は、フリウリを代表するラテン都市アクイレア Aquileia [イタリア語・ラテン語] / Aquilee [フリウリ語] のことを歌った新民謡（歌としては ロッソ Oreste ROSSO [3] の作曲によるものが有名）であるが、そのような時代のメンタリティをよく表わしている。

Contadin che tu rompìs la tiare / Di Aquilèe, ferme i bûs un moment: / Sot il
cjamp che la uarzine 'e are, / Sot la man che semene el forment, / Tal soreli e ta
l'ombre del nûl, / Je une impronte di Rome e la storie / E la glorie / Del nestri
Friûl!

Barcarûl che tu vens di Barbane / Quant ch'al sune l'antîc cjampanîl, / No tu sintis
un glon di cjampane / Ma une vôs che ti rive dal cîl. / E l'eterne peraule ti dîs, /
una vôs che traviarse la storie / E la glorie / Del nestri paîs!

Pelegrine de ultime uere, / Mari sante del nestri soldât, / Che bessole tu jentris la
sere / A preâ sot i pins dal sagrât, / Scolte, scolte, lajù il rusignûl / che ti puarte
cun tante dolcezze / La cjaresse / Del nestri Friûl!

Tal seren di una clare matine, / Eco, 'e rîf la marine là in fonz: / Alze i vôi, o
gjarnazie latine, / Su che blancje corone di monz, / Sul Friûl! E ten fede a l' idee /
che no mûr a la grande memorie / E a la glorie / De nestre Aquilèe!

(アクイレアの大地を耕す農夫よ / しばし牛を止めよ / 鋤が耕す畑の下
に / 麦の種を蒔くその手の下に / 日の光と雲の影の中に / ローマの刻印が
/ 我らのフリウリの歴史と栄光がある。

バルバーナ [4] から上ってくる船頭よ / あの古い鐘楼が鳴るとき / お前が
聞くのは鐘の音ではなく / 天からお前に届く声なのだ / 永遠の言葉がお前
に語りかける / 歴史を貫く声 / そして我らの国の / 栄光とを。

先の戦争の巡礼者である / 我らが兵士の聖なる母よ / あなたは、夕刻、一
人で教会の中庭に入り / その松の木のもとで祈りを捧げる / お聞きなさい、
あの夜鳴き鶯の声を / それはあなたの元に運んでくる / 甘美さとともに / 我々のフリウリの / やさしさを。

晴れ渡った朝の静けさの中で / 遙かかなたに微笑む海 / ラテンの氏族よ、
目を上げて見よ / 冠たる白き山々を / フリウリを。そして忠実であれ / 死ぬ
ことのない思いに、我々のアクイレイアの / 偉大な記憶と / 栄光とに)

アクイレイアは、アドリア海の近くにある、ローマ時代に建てられたもとラテン都市 [5] であるが、ローマ帝国の時代には、ミラノと並ぶ、イタリア北部の中心都市であった。今では寒村と化し、幾つかの遺跡、および中世に立てられた司教座大聖堂とその鐘楼が、往時を偲ばせるのみである。しかし、その大地に眠っているのはかつての偉大なローマの遺跡であり、鐘楼の鐘の音は古より続く歴史と栄光を語り続ける、というのである。

フリウリ人のことを「ラテンの氏族」[とよび、「ローマ」の刻印をフリウリの歴史と栄光であると位置づける。そして、それに、その「ローマ」の栄光と同一視されるイタリアのために命をかけて戦う、第一次世界大戦の兵士のために、祈りをささげる母の姿が描き出される。これらがすべて一つになって、「フリウリ賛歌」=「イタリア賛歌」の図式が出来上がり、郷土愛・祖国愛を鼓舞するものとなる。フリウリの誇る美しい自然を描いていると見える、白い山々、耀く海への言及 (アクイレイアはフリウリ平野の南部に位置するので、そこから北に目を向けるとフリウリの北部を占めるアルプスの峰峰が見え、南にはアドリア海が広がる、ということになる) も、あるいは、山岳地域から平野部まで戦争の最前線となったフリウリ、という意味合いが込められているのかも知れない。

[1] もちろん、現在では、イタリア語がイタリア共和国の隅々まで普及して、イタリア語を知らないイタリア共和国市民はほぼ存在しない。つまり、イタリア語以外の言語を話す人は、必然的にイタリア語とのバイリンガルであり、イタリア語話者であることと少数言語の話者であることとは、もはや、対立する概念ではない。

[2] Enrico FRUCH (1873 - 1932) フリウリ地方北部の山岳地帯であるカルニア地方の生まれ。教師、詩人。イタリア語およびフリウリ語で詩を残す。本稿に引用した歌 Aquilee については、PERESSI et alii (1989) [監修] に載せられたテキストによった。

[3] Oreste ROSSO (1911 - 2001) 司祭として勤める傍ら、音楽家、作曲家として活躍。多くの作品を残す。

[4] アクイレイアから程遠くないところにある、アドリア海干潟地帯にある、島の名前。聖母マリアにささげられた古いサンクチュアリのあることで有名。

[5] 都市が「ラテン」*latina* であるというのは、本来は、その住民にラテン市民権 (周知のごとく参政权の点ではローマ市民権よりも劣る) が付与されている、という法制度上の問題に関するものであろうが、本稿で取り上げるようなフリウリの文化的な文脈においては、むしろ、文化的・民族的な意味合いを込めて用いられているように感じられる。その限りにおいて、

ローマとほとんど同義に近く、事実、「ラテン＝ローマ的」*latino-romano* と2つの形容詞を重ねて用いることもしばしばある。後出の、「ラテンの氏族」も同じように理解するべきであろう。

2. 「ラテン＝ローマ文明」の最前線としてのフリウリ語

このような「ラテン＝ローマ的」起源の自覚は、フリウリの置かれている、特殊な地理的な状況と結びついている。つまり、フリウリ語域は、イタリア半島北部の東端、ロマンス系の諸語が話される最前線に位置し、北と東を、それぞれゲルマン語(ドイツ語) 圏およびスラヴ語(スロヴェニア語) 圏と境を接し、内部にも、スラヴ系、ゲルマン系の少数言語グループを抱えている。その結果、これらの言語との違いを強く意識せざるをえないわけである。

このような言語接触の意識は、ロマンス系言語であるフリウリ語とフリウリ語共同体は、「ラテン＝ローマ的」文化圏の、そしてローマ文明と自己を同一視するイタリアの、最前線をなす、という考えを生むことになる。

そのような最前線の意識は、次のような、キウルロ Bindo CHIURLO [1] の、フリウリ語とフリウリ民族に捧げた詩に良く表れている。「フリウリ文献学会」*Società Filologica Friulana* [2] の協会歌 *Il Cjant de Filologiche furlane* (作曲はザルディーニ Arturo ZARDINI [3] による) として作られたもので、今でもしばしば歌われる。「まじめで素朴」*serie e sclete* とか「質実剛健、正直で働き者」*salt, onest, lavoradôr* など、フリウリ人の伝統的な美德とされている特徴を褒める言葉をちりばめ、フリウリ語が健やかに育っていくように、とその繁栄を願う歌だが、フリウリ語の状況を、まさに、「スラヴとゲルマンの境目で」「ローマが自らの伝説を語る」と表現している。

また、ローマとイタリアとの同一視というイデオロギーが、失地回復運動を経て、ファシズムにまで受け継がれていることを考えれば、そのローマを代表するフリウリ語が「成長し」「広がるように」という言葉には、イタリアの一種の拡張主義(「失地回復運動」と言ったが)の精神・野心と結びつく危険性がすでに潜んでいる、とも言えなくはないであろう。また、「殉教者」という言葉も、本来は宗教的な意味の言葉(事実、アクイレイア - すでに見た通り海の近くである - は古くからのキリスト教の伝統を誇っており、当然、殉教者も出している)だが、ここでは、合わせて(第一次世界大戦での)戦死者の意味も込められていると考えられよう。

なお、フリウリ文献学会は、第一次世界大戦後にイタリアに併合された町ゴリツィア *Gorizia* (この町を中心とするゴリツィア地方はフリウリの最も東部に当たり、第一次世界大戦時まではオーストリア領であった)でこの町のイタリアへの併合を祝して創立されたもので、当初は、この地方でのイタリア文化の普及・振興の役割を期待されたものであったと言われているが、フリウリの言語・文化の研究と保護・育成において重要な役割を果たすに至る。

Un salût 'e Furlanie / da lis monz insin al mâr / donge il mâr il sanc dai màrtars /
su lis monz il lor altâr.

E la nestre ciare lenghe / va des monz fin al Timâf / Rome 'e dîs la so liende / sul
confin todesc e sclâf.

Che tu cressis mari lenghe / grande e fuarte, se Dio ûl / che tu slargis la to tende /
su la Ciargne e sul Friûl!

Che tu vadis, marilenghe / serie e sclete intôr intôr / tu confuarte dut chest popul /
salt, onest, lavoradôr!

(フリウリ語の国 [4] にご挨拶 / 山から海に至るまで / 海の傍には殉教者の
血が / 山には彼らの祭壇が。

そして我らの愛する言語は / 山からティマーヴォ川にまで至る / ローマは
語る自らの伝説を / ゲルマンとスラヴとの境目で。

母なる言葉よ、育ち行くように / 強く健やかに、神の望み給うなら / その
屋根を / カルニアとフリウリ [5] に広げるように。

母なる言葉よ、進み行くように / まじめに素朴に、広まり行くように / 質
実剛健、まじめで働き者である / この民を慰め励ませ。)

第二次世界大戦後、ゴリツィア地方のかなりの部分 (圧倒的にスロヴェニア語が強い東部) は、ユーゴスラヴィア領となったが、戦争による領土拡張・縮小とは必ずしも関係なく、フリウリ語域は、少しではあるが拡大するに至る。イタリアでは、おおむねこの地方でも、共通語 (イタリア語) の普及によって、もともと存在していたその地方特有の言語 (それが方言とよばれるか少数言語という範疇に入れられるかはここでは問題ではない) は、縮少の道をたどるのが普通であったので、フリウリ語の拡張は、まれなケースであると言える。それは、このすぐ後に見るように、スロヴェニア語を犠牲にする形で実現したものであった。

[1] Bindo CHIURLO (1886 - 1943) 文学評論家、文学史研究家、詩人。プラハ大学でイタリア文学を講じた。史上初のフリウリ語文学文選集を著す。言語学者 ペッリス Ugo PELLIS (1882-1943) などとともにフリウリ文献学会の創立者の一人であった。

[2] この名前を、会の活動内容を踏まえた上でふさわしい日本語に訳するのは必ずしも容易ではない。構成員や活動は多岐に渡っている上に、会の性格・特徴自体も、時とともに変化しているからである。しばしば会員自身も好む解釈によると、この名前の意味は、字義通り、「言葉」-logo- を「愛する」filo- 協会、であるというが、この解釈が設立者にまで遡るものかどうかは不明である。

[3] ZARDINI Arturo (1869 - 1923) 音楽家、作詞・作曲家。市の職員、音楽教諭。フリウリの「国家」とでも言うべき「エーデルワイス」Stelutis Alpinis (この「エーデルワイス」は、当然のことながら、サウンド・オブ・ミュージックで有名になった「エーデルワイス」とは別曲) をはじめとして、数多くの有名な歌の作詞・作曲する。本稿に引用した歌 Il Cjant de Filologjiche については、ROSSI (1983) に載せられたテキストを参照した。

[4] 「フリウリ語の国」と訳した **Furlanie** は、「フリウリ語が話されている地域」の意味で用いられることが多く、その点で、後出の「フリウリ」**Friul** [フリウリ語] / **Friuli** [イタリア語] というのとはやや異なる。

[5] 従来は、山岳地方が「カルニア」**Carnia** [ラテン語・イタリア語] / **Cjargne** [フリウリ語]、平野部が「フリウリ」と呼ばれていたのだが、現在では、両者を合わせて、「フリウリ」と呼ぶことが普通になっている。ただし、「カルニア」は、古代にフリウリに広くに住んでいたケルト系の民族 **carni** に由来する名前なので、歴史的には、「カルニア」こそが、現在「フリウリ」と我々が呼んでいる土地の本来の名称であった、とも言える。

3. イタリア語化の最初のステップとしてのフリウリ語化

フリウリを併合した統一イタリア王国は、併合当初から、しかしとりわけ特に第一次世界大戦後に、ますます、この地域の「非イタリア系」(スロヴェニア系・ドイツ系)の少数言語集団の存在を問題視し始める。そして、これらの住民に対してイタリア語への同化政策を持って臨んだ。

フリウリ語の話者は、イタリア語へと同化されるべき集団として圧力を受ける(公の場ではフリウリ語は役割を与えられず、学校教育ももっぱらイタリア語によってなされる)とともに、その言語・文化は先に述べたように(イタリア文化の普及の用に供されるべき)「ラテン＝ローマ文明の最前線」として称揚される、という両義的な扱いを受ける。

そのような中であって、非イタリア系の住民に対する同化政策の理論的根拠として、フリウリの文化が引き合いに出される。つまり、これらの人々は、伝統的にフリウリに住んで、その社会の一員として暮らしてきている、だから、言わば、彼らもフリウリ人なのだ、という論法である [1]。こうして、フリウリのスロヴェニア系住民は、言語・文化的にもフリウリに属するべきものとして、そのフリウリ語化が正当化される。その後に来るのは、他のフリウリ人たちの場合と同じような、イタリア語への同化である。

このような考え方がよく表れているのが、次の、「レジアの娘」**La Roseane** と言う歌(作詞・作曲とも、前出のザルディーニによるもの) [2] である。この歌に出てくる「レジア」**Resia** [イタリア語] / **Rezija** [スロヴェニア語] は、フリウリ北部山間部の谷で、スロヴェニア系の方言が話される場所として有名。レジアの出身の娘が、フリウリ人のある男と交わす会話を描いたものである。レジアの住民たちの祖先がロシアからやってきたという伝説(ここには歪曲された形であるにせよ自らのスラヴ系の出自が明確に自覚されている)が語られる一方、この娘にフリウリ語で「(あなたと同じように)私もフリウリ出身です」「私はレジアの出身です、私たちはフリウリ人です」と言わせている。また、同じくレジアの谷の出身である彼の恋人が、イタリアのアルプス山岳兵(イタリアという「お国」のために使える兵士!)という設定も「愛国心」に訴えるのに効果的である。

'Ai cjatât 'ne biele frute / bionde, sane, fate ben. / Cu la cotule curtute, / bielis spalis, un biel sen.

Cun rispièt 'i doi la man, / e 'i domandi là che sta / Jè mi dîs: Lui l' è furlan! /
Ancje jo soi su di là.

Da la Russie l'antenât / stabilît sot il Cjanin / il mio ben al è soldât: / 'l è di Resie,
'l è un alpin.

Ce bieleze de valade / cui paîs pojâz sul plan ... / de mê val soi 'nemorade: / soi
di Resie, 'o sin Furlans.

(私は美しい娘に出会った / ブロンドで健康的で美しい姿 / やや短いスカ
ートに / 美しい背中に美しい胸。

敬意を払いつつ手を差し伸べて / お国はどちらですかと尋ねると / 彼女が
言うには「あなたはフリウリ人ですね / 私もそこに住んでいます。

祖先はロシアからやってきて / カニン山のふもとに住み着いた / 私のいと
しい人は兵隊で / レジア出身で / アルプス兵です。

レジアの谷の美しさ / その高地に位置する村々とともに / 私の谷を心から
私は愛しています / 私はレジアの出身です、私たちはフリウリ人
です。」)

このような宣伝活動がどれだけ効を奏したかを判断するのは難しい。そもそも、政
治的圧力のほかにも、少数集団としての数的・社会的制約 (フリウリ人やその他の
イタリア人がスロヴェニア語が使うことはほとんど無く、スロヴェニア語話者のほ
うが多数派の言語であるイタリア語やフリウリ語を習得しなければならない) や、
スロヴェニア語話者に対する伝統的な偏見など、スロヴェニア語の話者が遭遇しな
ければならない困難は多かった。フリウリのスロヴェニア語圏が、主に経済的に貧
しい山間部に存在しており、過疎の問題が深刻であることも付け加えなければなら
ない。

レジアでは、現在でも、本来の固有の言語であるスロヴェニア系方言が今なお保た
れているが、20 世紀のあいだに、フリウリではいくつかの村・集落がスロヴェニア
語からフリウリ語へ完全に移行してしまった。そうでない地区でも、話者の高齢化
が目立ち、若い世代に言語の継承が行われないためにスロヴェニア語が消滅の危機
に瀕していることは珍しくない。

[1] フリウリ地方のスロヴェニア系住民は、(スロヴェニア国家の主要部分を構成するに至る、
カルニオラ、スティリア、カリンツィアなどの諸地方とは異なり) 方言の使用が優勢でスロ
ヴェニア標準語への参加があまり見られず、伝統的にヴェネツィア共和国に属し、その後も統
一イタリア王国への帰属を選択するなど、イタリア文化圏との繋がりが強かったことは確か
である。また、フリウリ人と密接な関係を持ちつつ生きてきたため、時には、隣人とのコミ
ュニケーションの必要からフリウリ語を身につけ、二言語使用・言語併用の生活を送ってき
た者も少なくなかった。ただし、フリウリ語との接触の度合いは、地域ごとに、また、個人

ごとにさまざまであり、フリウリのスロヴェニア人がみなフリウリ語との2言語併用者であったとは言えない。

[2] 本稿への引用は、ROSSI (1983) に載せられたテキストおよび楽譜によった。

4. 最後に

フリウリ人は、さまざまな民族が混ざって形成されたものである。そのため、それらの民族の一つだけにフリウリ人の起源を遡らせることは、もちろん、科学的には意味が無い。また、言語は、いかに重要であると言っても、文化の中の1つの要素に過ぎない。ローマの言語を受け継いだものだけがローマの文化を受け継いだわけではなく、ローマの影響はその他の国々にも及んでいるのであるから。しかし、ある時代のイデオロギーは、わざと1つの文化的要素、言語に注目し、そこから特定の政治的主張を引き出したのである。

フリウリ社会の形成に寄与した他の民族 — ケルト人、ゴート人、ランゴバルド人、ドイツ人、スロヴェニア人、ヴェネト人、そして、もちろん、「イタリア人」も — についても、彼らの姿がフリウリの歴史観のなかでどのように位置づけられて（あるいは操作されて）きたかということは大変興味深い問題であるが、それはまた別の機会に譲らなければならない。

参考文献

- [1] BENACCHIO, Rosanna (2003), “Zone di contatto slavo-romanzo in Friuli: i dialetti di Resia, Torre e Natisone” In *SLOVENIA, un vicino da scoprire. 80 Congrès de Societât Filologjiche Furlane*, Societât Filologjiche Furlane, Lubiana, pp. 413-432.
- [2] Centro Studi Nediža (1978), (a cura di), *Lingua, espressione e letteratura nella Slavia italiana*, San Pietro al Natisone (UD) - Trieste, Editoriale Stampa Triestina.
- [3] COURTENAY, Jan Baudouin De (1998), *Degli slavi in Italia / O slovenih v Italiji*, a cura di Centro studi Nediža, traduzione italiana: Giuseppe Loschi, traduzione slovena: Martina Kafol, Note introduttive su G. Loschi e J. Baudouin De Courtenay: Liliana Spinuzzi Monai, note al testo, Quaderni Nediža 2, San Pietro al Natisone – Trieste, Editoriale Stampa Triestina.
- [4] COURTENAY, J. Baudouin De (1986), (geordnet und übersezt von), *Materialien zur Südslawischen dialektologie und ethnographie. I Resianische Texte, gesammelt in den JJ. 1872, 1873 und 1877, Nebst Beilagen von Ella von Schoultz Adaiewski. (Vorgelegt am 19 August 1866). St. Petersburg, 1895, Photomechanisch Repro. – Val Resia / Grassau, West Germany, Arturo Longhino- - Arketöw.*
- [5] Centro Studi Nediža (1978), (a cura di), *La storia della Slavia italiana*, Quaderni Nediža 3, San Pietro al Natisone – Trieste, Editoriale Stampa Triestina,.
- [6] DAPIT, Roberto (1995), *La Slavia friulana. Lingue e culture. Resia, Torre, Natisone. Bibliografia Ragionata., Cividale, Circolo Culturale “Ivan Trinko” / San Pietro al Natisone, Cooperativa “Lipa”.*
- [7] FRAU, Giovanni (1984), *I dialetti del Friuli*, Udine, Società filologica friulana.
- [8] KOS, Janko (1992), *Pregled slovenskega slovstva*, Ljubljana, Državna založba Slovenije.
- [9] MANIACCO, Tito / MONTANARI, Ferruccio (1978), *I Senzastoria. Storia del Friuli dal 1866 al 25 aprile 1945*, Udine, Casamassima editore.
- [10] MERKÙ, Pavle (1987), “il dialetto solveno del Torre”, In *Gente e territorio delle Valli del Torre*, Tarcento, Comunità montana delle Valli del Torre / Centro friulano di studi “Ippolito Nievo”, 2a edizione, pp.179-181.

- [11] MERKÙ, Pavle (1976), *Le tradizioni popolari degli sloveni in Italia. Raccolte negli anni 1965-1974. / Ljudsko izročilo slovencev v Italiji. Zbrano v letih 1965-1974*, Trst, Založništvo tržaškega tiska / Trieste, editoriale stampa triestina.
- [12] PELLEGRINI, Giovan Battista (1972a), “Contatti linguistici slavo-friulani”, In PELLEGRINI (1972d), pp.421-438.
- [13] PELLEGRINI, Giovan Battista (1972b), *Introduzione all’Atlante storico-linguistico-etnografico friulano (ASLEF)*, Istituto di glottologia dell’università di Padova / Istituto di filologia romanza della facoltà di lingue e letterature straniere di Trieste con sede di Udine.
- [14] PELLEGRINI, Giovan Battista (1972c), *Saggi di linguistica italiana. Storia struttura società*, Torino, Boringhieri.
- [15] PELLEGRINI, Giovan Battista (1972d), *Saggi sul ladino dolomitico e sul friulano*, Bari, Adriatica editrice.
- [16] PELLEGRINI, Giovan Battista (1975), “Sul dialetto e sulla toponomastica della Val Natisone: a proposito di contatti linguistici slavo-friulani”, In PELLEGRINI (1972c), pp. 462-478.
- [17] PERESSI, Lucio / CARLON, Vittorina / SGUBIN, Eraldo (1989), *La stradegnove. Antologje pai fruz des scuelis. Su ideazion di Dino Virgili. Cun disens di Alessandro D’Osualdo – Di Suald., s. l., Societât Filologjche Furlane.*
- [18] PIRONA, Giulio Andrea / CARLETTI, Ercole / CORGNALI, Giovanni Battista (1992), *Nuovo Pirona.Vocabolario Friulano. 2a edizione. Aggiunte e correzioni riordinate da Giovanni Frau, Udine, Società Filologica Friulana.*
- [19] ROSSI, Bruno (1983), “Oh ce biel ciscjel a Udin”. *100 canti del Friuli popolari e d’autore. Testie musiche con versione italiana. Disegnato da Stefania Gabrici. Forli, College Music.*
- [20] SKUBIC, Mitja (1997), *Romanske jezikovne prvine na zahodni slovenski jezikovni meji*, Ljubljana, Znanstveni Inštitut Filozofske fakultete.
- [21] STEENWIJK, Han (1992), *The Slovene dialect of Resia*. San Giorgio. Amsterdam - Atlanta, GA , Editions Rodopi B. V.
- [22] STRANJ, Pavel (1989), *La Comunità sommersa. Gli sloveni in Italia dalla A alla Ž*, Trieste, Editoriale Stampa Triestina.